

区 分	課 程
-----	-----

論 文 の 和 文 要 旨

博士論文の題目：「できない」ことが「できる」ようになるプロセスに関する
研究—適応理論を基にした質的アプローチ—

学 籍 番 号：215D04

氏 名：富永 哲志

指 導 教 員：土屋 裕睦 教授

本研究の目的は、「できない」ことが「できる」ようになるプロセスを検討することであった。具体的には、「できないことができるようになるプロセスをどのように体験するのか」というラージリサーチ・クエスチョン（Research Question：以下「RQ」と略す）を設定し、質的にアプローチを行い、発展継承可能で有益な仮説的知見を導き出すことを目指した。この目的を達成するために以下6つの研究課題を設けた。

【研究課題1】は、「できない」ことが「できる」ようになるプロセスにアプローチする上での理論的枠組みを提示することであった。ここでは、体育・スポーツ心理学領域、コーチング学領域における「できない」ことが「できる」ようになるプロセスに関連する先行研究の概観を行い、現状と課題を整理した。その結果、「できない」ことが「できる」ようになるプロセスを体験している者の内的な構造に着目する必要性があり、「適応」という理論的枠組みを基に、質的な立場から研究する必要性を確認した。

【研究課題2】は、「できない」ことが「できる」ようになるプロセスに質的にアプローチする上で必要な方法論の熟達を図った。具体的には、構造構成主義をはじめとした認識論の整理から質的研究の特徴や現象学的態度の理解、そしてTEMとM-GTAという本研究で採用する分析方法に加え、アブダクションのような拡張型推論について整理することで本研究者が依って立つ視点や準拠する方法論的枠組みを開示した。

【研究課題3】は、個体内における「できない」ことが「できる」ようになるプロセスの概念モデルを生成することであった。即ち、「できないことができるようになることをどのように語るのか」というスモールリサーチ・クエスチョン（research question：以下「rq」と略す）1を設定し、質的にアプローチした。具体的には運動課題を「できない」個体が「できる」ようになるまでのプロセスをビデオ撮影して作成した「観察記録」と、観察後に実施した内省報告から得られた「語り」を併せてTEMを参考に分析した。その結果、「調整的適応」と「過剰的適応」の繰り返しから構成される概念モデルを生成した。

【研究課題4】は、研究課題3で生成された概念モデルを基に個体間における理論モデルへと精緻化することであった。即ち、「できないことができるようになることをどのように対話するのか」というrq2を設定し、質的にアプローチした。具体的には運動課題を「できない」個体同士が共に「できる」ようになるまでのプロセスをビデオ

オ撮影して作成した「観察記録」と、観察後に実施した内省報告から得られた「語り」を併せて M-GTA を参考に分析した。その結果、模索型、拡張型、葛藤型、調和型、拡散型、密着型、混乱型、共存型という 8 つのタイプに類型化した「アジャストメント・ステイタス・パターン理論」へと精緻化した。

【研究課題 5】は、研究課題 4 で精緻化された「アジャストメント・ステイタス・パターン理論」を基に集団内における具体的な介入方略を検討することであった。ここでは、「できない」ことが「できる」ようになるプロセスを大学新生アスリートが大学運動部活動へ適応する場面に適用した。つまり、「大学新生アスリートは適応支援プログラムを通じてどのように大学運動部活動に適応するのか」という rq3 を設定し、質的にアプローチした。具体的には適応支援プログラムを実施し、プログラムに関する「観察記録」とセッションに関する参加者の「回顧的自由記述」に対して M-GTA を参考に分析した。その結果、乖離型、接近型、交流型、融合型、という新たに 4 つのタイプに類型化した。

【研究課題 6】は、「アジャストメント・ステイタス・パターン理論」を集団間における競技スポーツ場面へ応用することであった。ここでは、「できない」ことが「できる」ようになるプロセスをサッカーのアディショナルタイム (Additional Time: 以下「AT」と略す) における得失点場面に適用した。つまり、「大学生サッカー選手はスコアが動いた AT をどのように語るのか」という rq4 を設定し、質的にアプローチした。具体的には大学生サッカー選手を対象に AT にスコアが動いた試合に対する半構造化面接を実施し、得られた「語り」を M-GTA を参考に分析した。その結果、統制型、隷属型という新たに 2 つのタイプに類型化した。

以上のことから、「できないことができるようになるプロセスをどのように体験するのか」という RQ に対して、「個体内、個体間、集団内、集団間の水準におけるアジャストメント・ステイタス・パターンを体験する」と結論づけた。

(2000 字程度)